聖武天皇佐保山南陵及び皇后天平応真仁正皇太后佐保山東陵御拝所その他整備工事に伴う調査

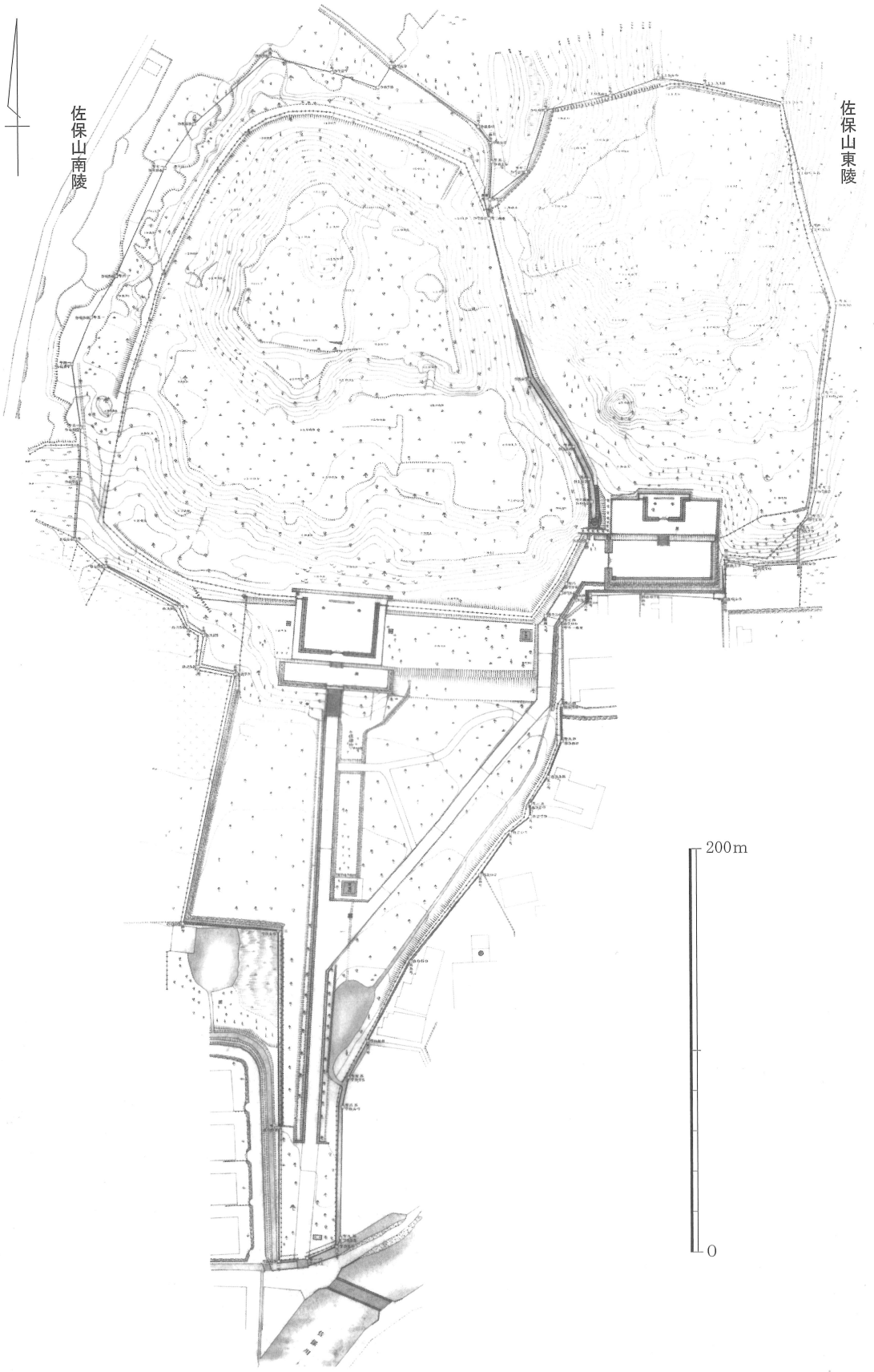
聖武天皇の佐保山南陵（以下、「南陵」と略す）と一般的には「光明皇后」として知られる同天皇皇后天平応真仁正皇太后の佐保山東陵（以下、「東陵」と略す）は、近鉄奈良駅の北方約800 m、奈良市法蓮町の、いわゆる佐保山丘陵の南斜面に隣り合って所在している。南陵は、幕末まで南斜面に所在していた陵寺とされる眉間寺の存在により、遅くとも延宝9（1681）年には現在地であると認識されていた[1]。対して東陵は明治12（1879）年に治定されたものである[2]。両陵とも現在では陵形を「山形」に区分し、拝所背後の丘陵部全体を墳塋と見なしているが[3]、陵墓地形図にも表現されているように、それぞれの墳塋頂部のほぼ中央に小規模な円丘が存在している（第51図）。南陵の円丘はかつて墳塋本体と見なされていたもので、明治21年に埋め戻されるまでは「石槨」が露出していた[4]。この円丘については、「法蓮北畑古墳」と呼ぶ向きもある[5]。一方、東陵の円丘については治定の理由書にその存在が記されておらず[6]、治定後に南陵に倣って造作されたものである疑いが強い。両陵を隔てる堀切状の地形をはじめ、両陵の各所には円丘以外にも平坦面や急斜面、高まりなどの人為的改変を受けたと思われる地形が存在しており、それらも陵墓地形図からうかがい知ることができる。東陵から東方の尾根続きにある奈良市立若草中学校敷地までの一帯は、16世紀後半に松永久秀によって築かれた多聞山城の中心部であり、両陵間の堀切状地形や東陵各所の人為的地形は多聞山城の普請によるものと考えられている[7]。一方、南陵南斜面に見える人為的地形は、直接的には「文久の修陵」まで同所に所在した眉間寺に伴うものであるが[8]、南陵にも多聞山城に関連する出郭が普請されていた可能性が指摘されており[9]、その場合は、眉間寺が多聞山城廃城後に再建されるにあたってその地形を活用したことになろう。

両陵における調査事例としては、昭和54年の南陵の鳥居改築工事に伴う立会調査、同年の同陵内排水工事に伴う立会調査、同57年の南陵崩壊箇所の露出石組み実測調査と同所復旧工事に伴う立会調査、同年東陵山裾崩壊箇所復旧工事に伴う立会調査、同62年の東陵の鳥居改修工事に伴う立会調査、平成2年の見張所改修・同所下水管取り付け工事に伴う立会調査、平成21年の南陵の鳥居改築工事に伴う立会調査などがある。うち、昭和57年の南陵南側斜面頂部付近の崩壊箇所からは石組み遺構が露出し、崩落土からは近世瓦が、同年の東陵東側の山裾崩壊箇所では、崩落土中から火葬骨および蔵骨器に使用された羽釜などが出土している[10]。

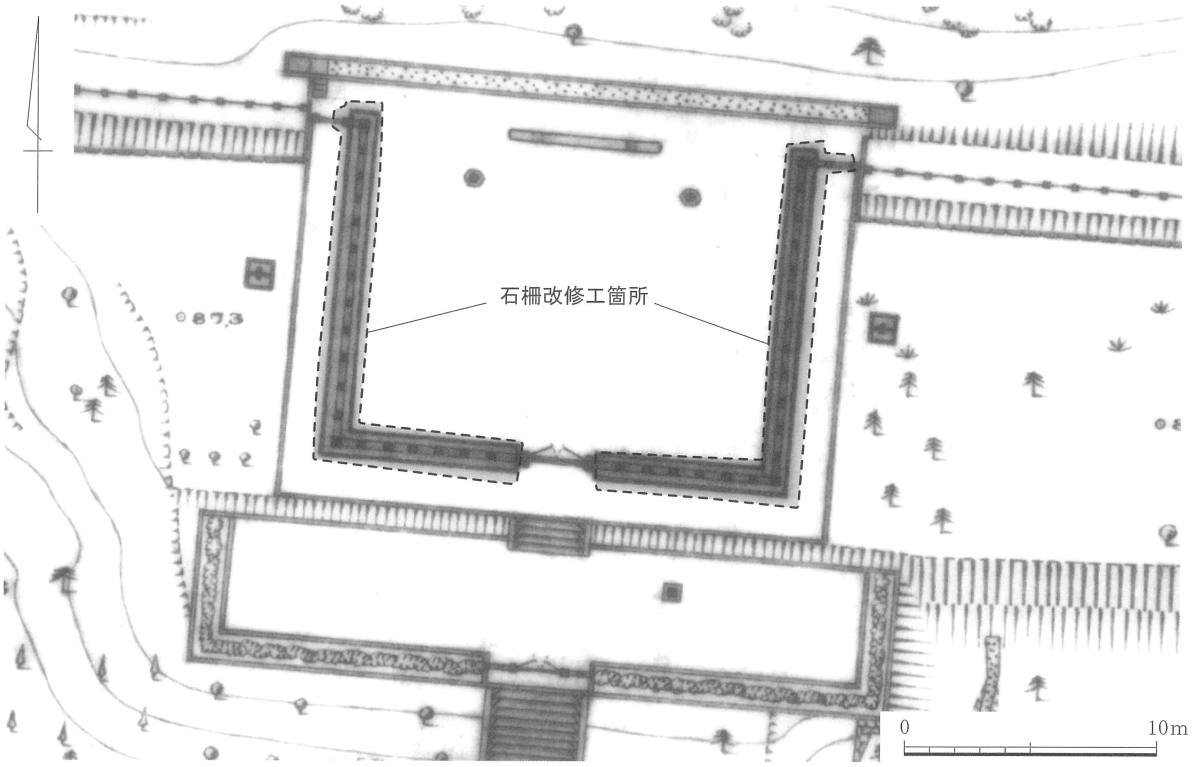
今回の工事は、南陵拝所内の石柵に狂いが生じて倒壊の危険が生じたこと、東陵拝所背後の石積が孕んで崩壊の危険が生じたことに加えその上方法面も急傾斜による危険性が指摘されたことから計画されたものである。後述する東陵での石組み排水溝発見によって、その調査中工事が遅滞したこと、再利用予定の石材が傷みによって利用不可であることが判明したことなどにより契約変更がおこなわれ、最終的な工期は平成25年8月20日～平成26年2月7日となった。工期中掘削がおこなわれる際には、現地の陵墓職員が立ち会って遺構・遺物の存否に注意を払うとともに記録作業をおこなった。東陵における石組み排水溝確認によって本部職員が急遽現地調査をおこなったのは11月5日～8日である。

南陵拝所の石柵改修工箇所では、平面「コ」の字形に、幅約1.5～1.8 m、長さ約42.5 m、深さ約0.5～0.7 mの範囲を掘削した（第52図）。掘削箇所では表土層の直下に盛土層を確認した。盛土層からは、遺構に伴わない状態で、五輪塔の部材、背光五輪塔類などの石造物が出土している[11]。南陵拝所に所在する平坦面は拝所に必要な範囲を大きく超えて東方へ続いているが、幕末の修陵で造成された拝所は必要な範囲のみであることが通例であるので、この平坦面は幕末のものとは思われない。石柵改修工箇所で確認された盛土は、多聞山城築・廃城時あるいは眉間寺再建に伴う16世紀後半～17世紀前半に遡るものである可能性が高い。

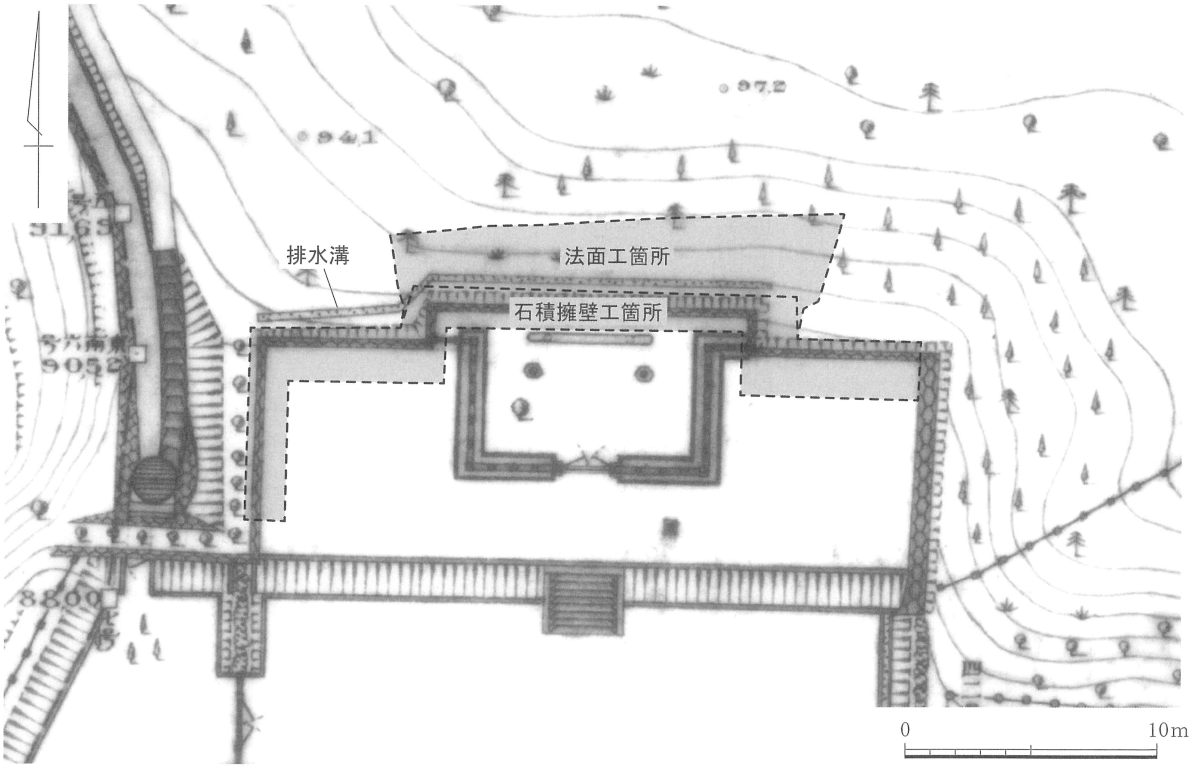
東陵の法面工箇所では、法面の傾斜を緩くするために長さ約30 m、最大幅約3.5 m、最大高低差約3.2 mの範囲を掘削し、石積擁壁工箇所では、既存の石積を一度撤去して新たな基礎を打って再度積み直すにあたって、総延長約43 m、最大幅約2.6 m、最大高低差約2.0 mの範囲を掘削した（第53～56図）。掘削箇所では、



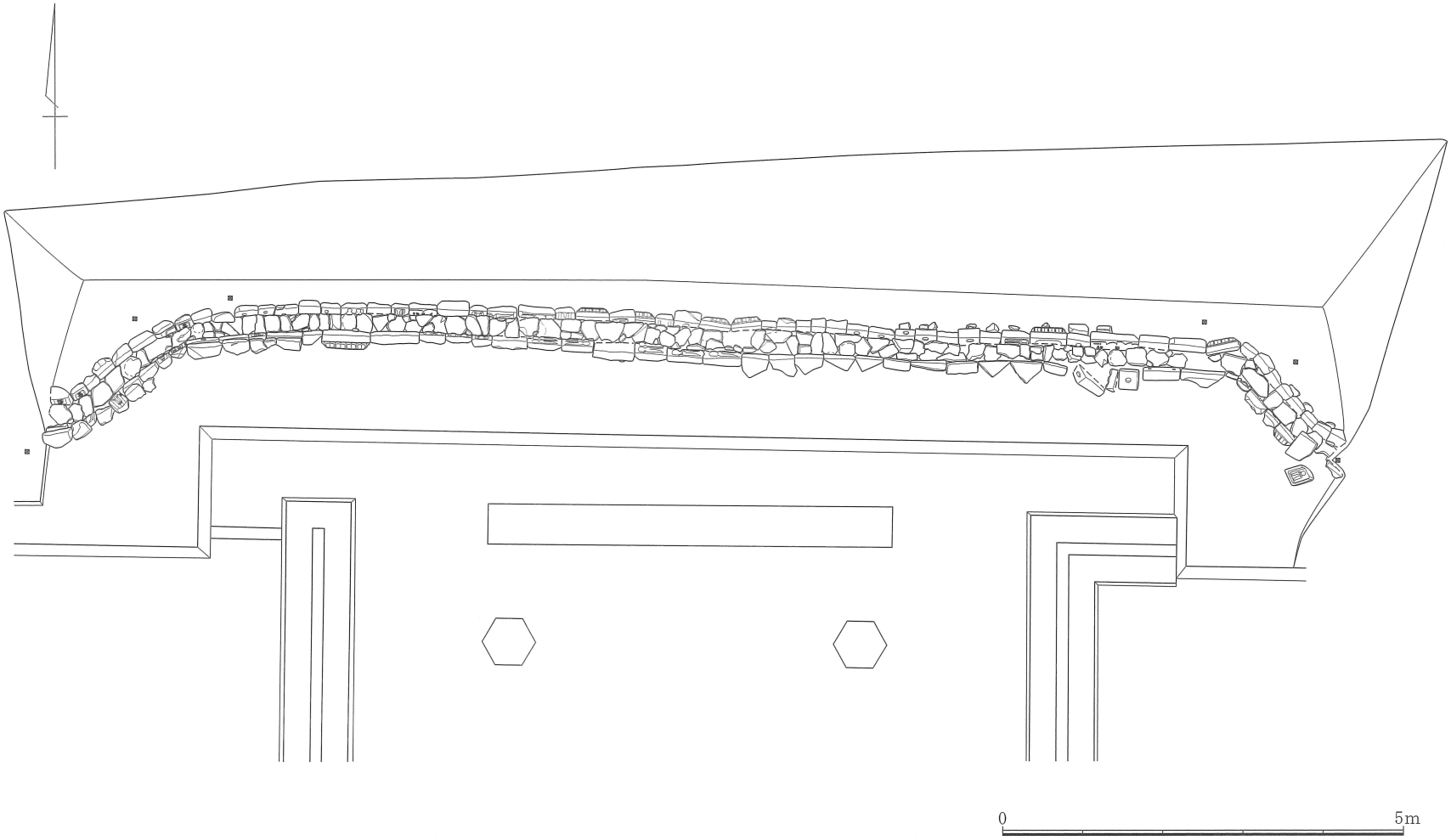
第51図　佐保山南陵・佐保山東陵　地形図(1/1500)



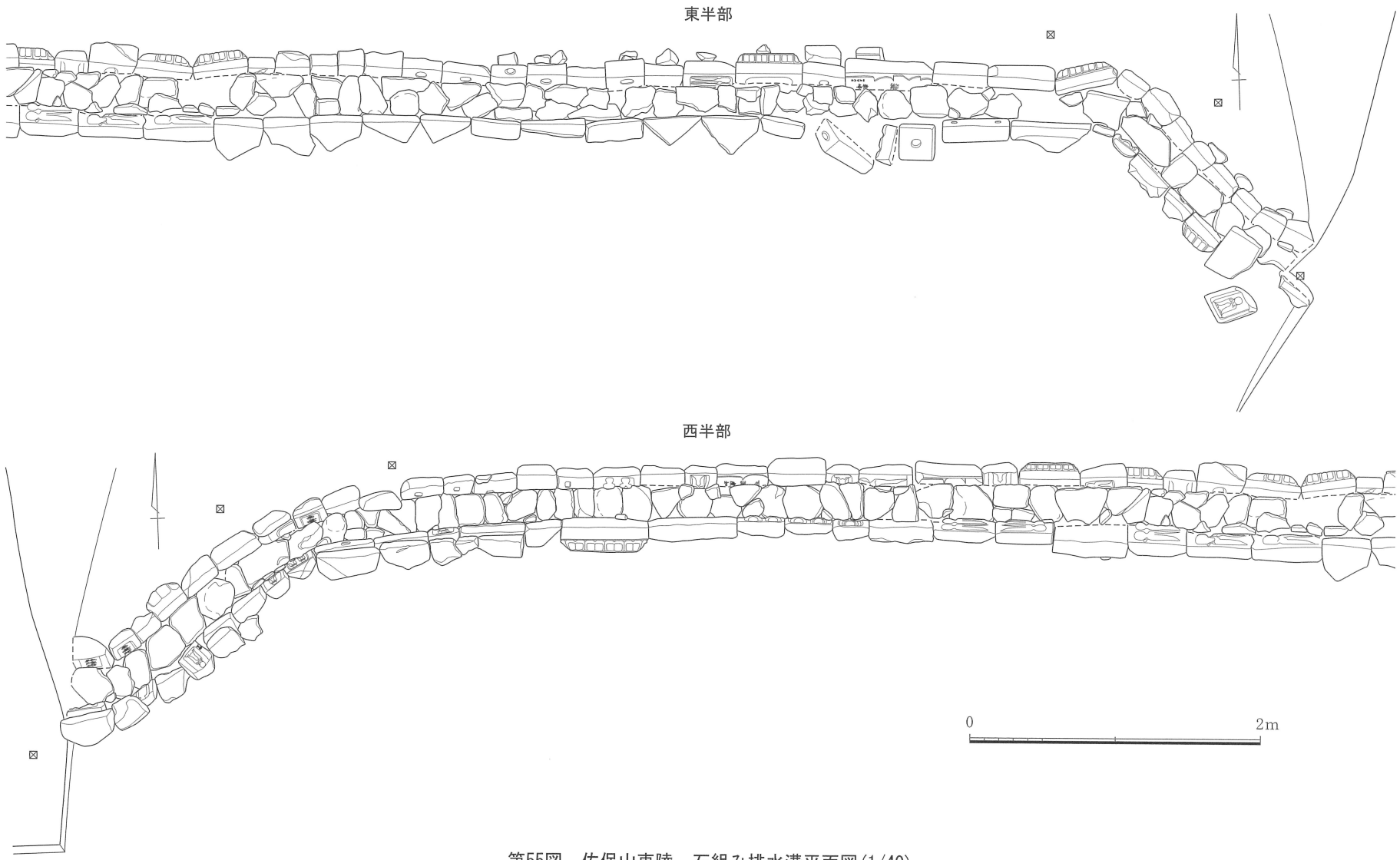
第52図　佐保山南陵　掘削箇所位置図(1/300)



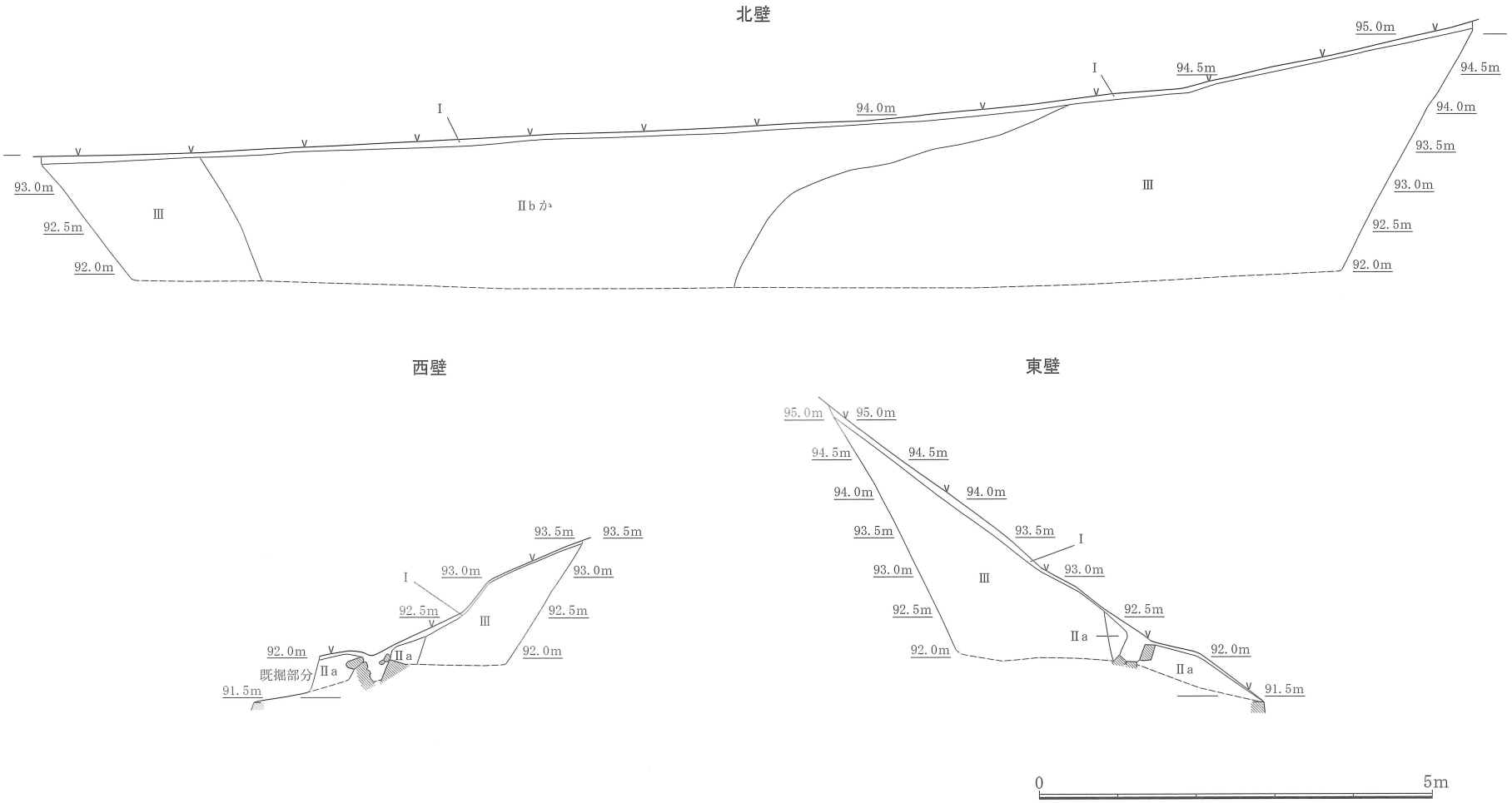
第53図　佐保山東陵　掘削箇所位置図(1/300)



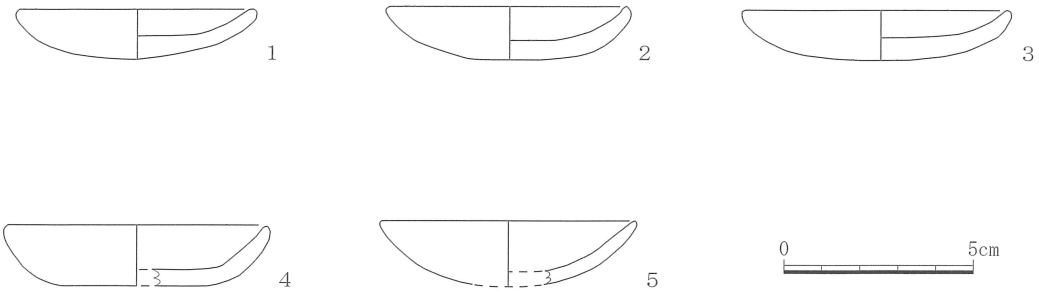
第54図　佐保山東陵　法面工掘削箇所平面図(1/80)



第55図　佐保山東陵　石組み排水溝平面図(1/40)



第 56 図　佐保山南陵　法面工掘削箇所断面図（1/80）



第57図　佐保山東陵　出土品実測図（1/2）

表土層（Ⅰ層）、石積の裏込めなど明治22年におこなわれた拝所整備時の盛土層（Ⅱａ層）、地山層（Ⅲ層）を確認した。一部土層については地山層であるのか盛土層であるのか判別しかねたものもあり、それが盛土層であるならば、拝所整備以前のもの、すなわち、南陵拝所の盛土層と同様に16世紀後半～17世紀前半に遡るもの（Ⅱｂ層）である可能性が高い。東陵の掘削箇所で特筆されるのは、石積と法面の変換部に存在していた犬走り状の平坦面において、多数の石造物を転用した石組み排水溝（以下、単に「排水溝」）が確認されたことである（図版50）。この排水溝は、平面「凸」字形を呈する拝所の北辺石積に沿うように屈曲させつつ東西方向を指向して設けられており、検出部分の総延長は約18ｍで、今回の掘削範囲外の東西両側にも延びている。両側壁、底面に石材を並べており、それによって形成される溝の幅、深さは、それぞれおよそ20～35㎝、10～20㎝である。調査期間の制約から石材を撤去しての完掘はできなかったが、掘方として一回り大きい素掘りの溝を掘ったあと、側壁材を立て、底石を敷き並べたものと観察された。側壁材と掘方壁面の間に支えとなる別の石材を配した箇所も確認できた。底石には整形されていない板状の石材が用いられており、溝の底面を平滑にするためか、掘削が困難なほど堅い漆喰のようなものが塗られていた箇所もあった。一方、側壁材のほとんどは整形された面を有する石造物を転用したもので、五輪塔の火輪・地輪、宝篋印塔の塔身や基礎、背光五輪塔類などの塔類、単体あるいは二体の仏像が表現される像類が認められ、間知石も少数用いられていた。若草中学校敷地内ではこの排水溝と酷似する石造物によって構築された溝が検出されており、多聞山城に伴うものとされている[12]。しかし東陵の排水溝は、近代に造成されたことが明らかな拝所背後の石積に沿っていること、昭和初期に作成された陵墓地形図にその一部が表現されていること、石材中に間知石が見られること、間知石にモルタルが付着していたことなどの点から、調査段階において近代の所産と判断していたが、明治22年の工事記録から、東陵の拝所を整備した際に設置されたものであると確認することができた[13]。石造物は石積の裏込めにも用いられており、工事の際に手近なところにあった石材を集めて使用しているものと見られる。なお、石積裏込めからはかわらけも採集されている（第57図）。

両陵から出土した石造物はいずれも墓碑と考えられるもので[14]、東陵出土の背光五輪塔類のなかに「天文九[唐字]」（1540）、「天正十三年」（1585）の年紀があるものを確認できた。昭和57年に東陵崩壊箇所から出土した遺物と考え合わせると、すでに指摘されているように多聞山城築城以前には一帯は墓地であり[15]、それを破壊して築城や眉間寺再建の普請がなされ、近代の陵墓整備の際に周囲に散在していた墓碑が転用された、といった流れを想定することができよう。

以上、保存されるべき遺構は存在しないと判断されたため、工事は予定通り施工された。なお出土した石造物については南陵内に仮安置しており、いずれ詳細な調査をおこないたいと考えている。　（有馬　伸）

註

（1） 延宝９（1681）年の序をもつ林宗甫の『大和名所記』（『和州旧跡幽考』）に「眉間寺の堂の軒につゞきて聖武天皇佐保山南の陵あり」との記述がある。『大和名所記』の内容については下記の文献で確認した。

林　宗甫『大和名所記－和州旧跡幽考－』、臨川書店、1990年。

（2）「仁正皇后御陵ヲ佐保山東陵ト定ム」『帝室例規類纂』巻31　明治12年　陵墓門　山陵（宮内公文書館所蔵、識別番号：23353－31）。

（3）「歴代順陵墓等一覧」『陵墓地形図集成［縮小版］』、学生社、2014年。

（4）「聖武天皇御陵前御鳥居、木柵、御神明門周囲丸太柵、制札屋形其ノ他修繕ノ件」『諸陵寮出張所　工事録』明治21年5（宮内公文書館所蔵、識別番号：2558－5）。

（5） 今尾文昭「天皇陵古墳解説」『天皇陵古墳』、大巧社、1996年。

（6） 註（2）に同じ。

（7）「多聞（大和）」『浅野文庫蔵諸国古城之図』、新人物往来社、1981年。

伊達宗泰「多聞城跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯、奈良県教育委員会、1958年。

村田修三「多聞城」『日本城郭大系』第10巻　三重・奈良・和歌山、新人物往来社、1980年。

（8） 現状の平坦面と寛政３（1791）年刊の『大和名所図会』に描かれた眉間寺堂舎の配置状況がよく一致していることが指摘されている。

高田　徹「松永久秀の居城－多聞・信貴山城の検討－」『織豊系城郭の成立と大和』、大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会、2006年。

なお、『大和名所図会』の内容については下記の文献で確認した。

秋里籬島『大和名所図会』（『版本地誌大系』３）、臨川書店、1995年。

（9） 伊達宗泰「多聞城跡」、前掲註（７）に同じ。

村田修三「多聞城」、前掲註（７）に同じ。

（10） 石田茂輔「調査の全容」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部、1981年。

石田茂輔「調査の全容」『書陵部紀要』第35号、宮内庁書陵部、1984年。

松田和男・佐藤利秀「佐保山東陵山裾崩壊復旧工事箇所の調査」『書陵部紀要』第35号、宮内庁書陵部、1984年。

飯倉晴武「昭和六十二年度　陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第40号、宮内庁書陵部、1989年。

飯倉晴武「平成二年度　陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第43号、宮内庁書陵部、1992年。

福尾正彦「調査の概要」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2001年。

（11） 以下、石造物の呼称については、下記の文献を参照した。

朽木　量「奈良盆地における郷墓の調査　調査の方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第111集　大和における中・近世墓の調査、国立歴史民俗博物館、2004年。

村木二郎「石塔の多様化と消長」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集　地域社会と基層信仰、国立歴史民俗博物館、2004年。

（12） 伊達宗泰「多聞城跡」、前掲註（７）に同じ。

中井公『多聞廃城跡発掘調査概要報告書』、奈良市教育委員会、1974年。

（13）「仁正皇后御陵前鳥居石柵其ノ他修繕ノ件」『諸陵寮出張所　工事録』明治22年3（宮内公文書館所蔵、識別番号：2559－3）。

（14） 石造物の評価については陵墓管理委員白石太一郎先生よりご教示を賜った。記して謝意を表します。

（15） 伊達宗泰「多聞城跡」、前掲註（７）に同じ。

1　排水溝全景（東から）

2　排水溝全景（西から）

3　排水溝東端部（南西から）

4　排水溝東寄り（南西から）

5　排水溝中央付近（北東から）

6　排水溝西寄り（南西から）

7　排水溝西側屈曲部（南から）

8　排水溝西側屈曲部（北西から）